エッセイ

大伴家持生誕一三〇〇年に寄せて

高岡市万葉歴史館学芸課長
新谷秀夫 氏

幼いころに母と死に別れ、その後父も亡くなり、叔母に育てられる。若い時は多くの女性と浮き名を流したが、育ててくれた叔母の娘と結婚。しかし、はじめて就職したら、仕事の関係で五年間も家に帰れない。その後、地方勤務で経験を積んで実績を上げたが、本社では反対勢力が擡頭していたので、なかなか出世できずに本社勤務と地方勤務を交互に。多少左遷の憂き目に遭うが、クビになることなく働き続け、退職間際になってやっと、友人の計らいで大抜擢の出世。しかし、死んだ直後に反対勢力の謀略で犯罪者の汚名を着せられ、墓を掘りかえされて息子とともに骨が流される。汚名が晴れるのは二〇年後。そして、ずっと真剣に携わっていた仕事が日の目を見る、それが『万葉集』。

現代に生きるサラリーマン風にたどると、大伴家持の人生はこのような波瀾万丈なものになります。当時の歴史を記録した『続日本紀』からこのような家持の人生は確認できるのですが、それは「何々の職に就いた」という、あくまでも《記録》のみです。その時々に家持が何を考え、どう行動したかは『続日本紀』ではわかりません。それを補うのが、家持が詠み続けた和歌であり、それがおさめられている『万葉集』なのです。ただし、その和歌も四二歳で詠んだという歌を最後に途絶えます。その後六七歳で亡くなるまでの二五年間――この期間こそがまさに波瀾万丈だったのですが――家持が何を思い、何を考えていたかは推測するしかありません。

新しき　年の初めの　初春の
今日降る雪の　いや重け吉事

さて、『万葉集』を代表する歌人の一人で、編纂者と考えられている大伴家持は、養老二(七一八)年生まれとされています。《されている》と書いたのは、確証となる記録がないためです。後世の史料『公卿補任』に残された記録から家持の生年には、「天平元(七二九)年」と「養老二年」の二つの説があったようなのですが、次に掲げる万葉歌を根拠に、現在は養老二年を有力と考えています。

ふりさけて　三日月見れば
一目見し　人の眉引き
思ほゆるかも

いつ詠んだかを明記しない歌ですが、『万葉集』の編纂基準から、天平五年の作と考えられている家持の初作歌です。もし天平元年生まれならば、わずか五歳で「三日月を見ると、一目見たあの人の眉が思い出されてならない」という恋歌風の歌を詠んだということになります。さらに、天平二年に大宰府(現在の福岡県)にいたことが『万葉集』から確認できることから、生まれてまもなく首がすわったかどうかという乳飲み子の時に大宰府に行ったとするよりは…ということもあって、養老二年生まれが有力になっています。

確証とは言えないかもしれませんが、家持の生年は『万葉集』を根拠に推定されているのです。ただ、《わずか五歳では…》や《生まれてまもなくでは…》というように、この推定には客観的な根拠があるわけではありません。もしかすると五歳で初作したかもれませんし、二歳で大宰府に行ったかもしれません。あくまでも推定であり、その根拠は史料ではなく『万葉集』という文学作品なのです。残された史料が少ない古代を考えるには、文学作品とは言え『万葉集』を二次的史料として使わざるをえないのです。客観性が乏しいと感ずるかもしれませんが、『万葉集』に残された記録から、家持は養老二年生まれとする説が定着したというのが現状です。

と言うことで、古代に倣って《数え年》で換算し、高岡市は平成二九年を家持生誕一三〇〇年記念の年とし、さまざまなイベントを開催しました。富山県は、現在と同じく《満年齢》で平成三〇年を記念の年と考え、さまざまな記念イベントを開催する予定です。

どちらが正解？　なぜ同じ年にしない？　なんて考えず、生誕一三〇〇年を二ヶ年にわたってお祝いしませんか。きっと家持は、喜んでいるにちがいないはずですから。

プロフィール

新谷 秀夫（しんたに　ひでお）
高岡市万葉歴史館学芸課長
大阪府生まれ。関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了。1993年より(公財)高岡市民文化振興事業団高岡市万葉歴史館に勤務。専門は萬葉集をはじめとする和歌文学研究。とりわけ近年は萬葉集の享受史と越中時代の家持の歌表現を研究テーマとし、その成果によって2010年第27回「とやま賞」を受賞。上代文学会理事、美夫君志会理事、萬葉学会会員。近著に『越中万葉うたがたり』(2010)、『古代史がわかる『万葉集』の読み方』(共著、2011)、『万葉集を旅する』(監修、2013)、『うたわれた富山湾(日本海学研究叢書)』(2015)。